

《資料紹介》

樽床遺跡群の追加資料報告

三枝 健二

-
- | | |
|------------------|----------------|
| 1 はじめに | 4 樽床遺跡群の立地について |
| 2 樽床遺跡群の追加資料報告 | 5 おわりに |
| 3 横長剥片剥離関連資料について | |
-

【要約】

山県郡北広島町内に所在する樽床遺跡群の追加資料報告を行うと共に、同遺跡群と広島県域を中心とした中国山地南斜面に展開する遺跡の関係などを考える。

1 はじめに

樽床遺跡群（第7・8図）は、山県郡北広島町西部（旧芸北町）に位置する八幡原から聖湖畔にかけて分布する後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡群で、1986年の報告（梅本・児玉・三枝ほか1986、以下「86報告」と略）以降に2007年（三枝2007b、以下「07追加報告」と略）と2016年（三枝2016、以下「16追加報告」と略）に追加報告を行っている。今回報告する資料は、これらの報告で未掲載であった資料を中心とするもので、併せて当遺跡群の立地や横長剥片剥離関連資料の整理なども行う。

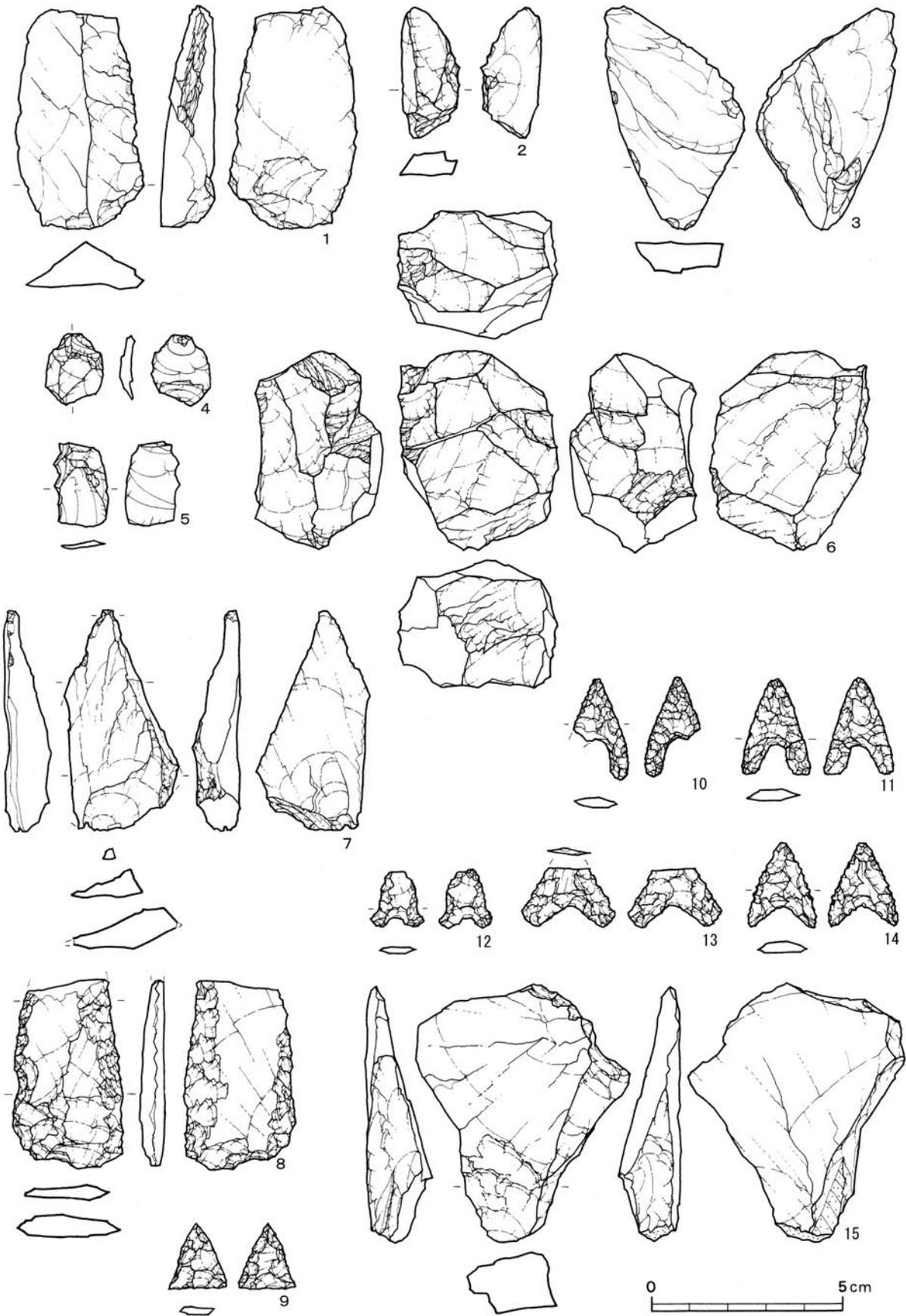
2 樽床遺跡群の追加報告資料

今回の追加資料を報告するにあたって、参考資料として86報告以降に報告したG地点・C4地点及び苧屋形遺跡B地点の資料（第2・3図）も再掲載する。

樽床遺跡群G地点の資料（第1図1～6）

G地点（標高749m前後）は、聖湖東岸のほぼ中央部に突出した岬状部の付根付近を中心とする。86報告では黒曜石を中心としたナイフ形石器や搔器など多数の石器類を報告した。散布地内の小規模な土層断面でATを確認しており、同層と層位関係を持つ文化層の存在が想定される。

1は粗質の安山岩製横長剥片で、最大長3.40cm、最大幅5.90cm、最大厚1.40cm、重量26.38gである。打面の延長に亀裂集合部があり、背面には分割面と思われる平坦な剥離面と主要剥離面と同一方向の2面の剥離痕を留めている。2は安山岩製横長剥片で、最大長1.80cm、最大幅3.45cm、最大厚0.70cm、重量3.30gである。背面の平坦な剥離面と打点が移動する複数の剥離痕を留めている。3は安山岩製の横長状剥片で、最大長3.65cm、最大幅5.95cm、最大厚1.30cm、重量21.50gである。縁部に自然円礫面、背面と打面に平坦な剥離面を留めている。4は小規模な黒曜石製



第1图 石器实测图 (2/3)
 (1~6 : G地点, 7~9 : C地点, 10~12 : N地点, 13 : M地点, 14·15 : SN地点)

剥片で、最大長 1.90cm, 最大幅 1.55cm, 最大厚 0.35cm, 重量 0.86 g である。5 も小規模な黒曜石製の縦長状剥片で、最大長 2.25cm, 最大幅 1.45cm, 最大厚 0.30cm, 重量 0.77 g である。6 は安山岩製の縦長剥片石核で、最大長 5.35cm, 最大幅 4.20cm, 最大厚 3.40cm, 重量 87.10 g である。表裏両面中央に平坦な剥離面（展開右端図の中央面が素材剥片の主要剥離面）を残しており、側面で打面と作業面を入替え寸詰まりな縦長剥片の剥離を行っている。

G地点に関しては07追加報告（第2図16～21）を行っている。全て黒曜石製で、縦長剥片素材の搔器（16～18）、86報告第11図19の搔器上半に接合する折断剥片（19）は、搔器の長さを整えるための意図的な折断の可能性が考えられる。打面と下端部を欠失する小型の縦長剥片（20）、薄手の剥片下端に加工を施した錐形石器（21）などである。

樽床遺跡群C地点の資料（第1図7～9）

C地点は、聖湖北端部湖畔のC1・C2・C3地点とその北方のキャンプ場炊事場付近（標高760m前後）のC0地点に分かれ磨製石斧や石鏃・縄文土器など縄文時代の遺物も見られた。86報告ではC0地点の黒曜石製の細石刃が特徴的で、磨製石斧や石鏃・縄文土器など縄文時代の遺物も多く報告した。また、C0地点東方の標高770m前後付近で安山岩製のナイフ形石器や剥片・石核類を確認（三枝2007b・2016）しており、ここをC4地点と呼称する。この地点ではキャンプ場内の工事により黒色土層下部から黄褐色粘質土層にかけての層準で遺物の出土を確認した。

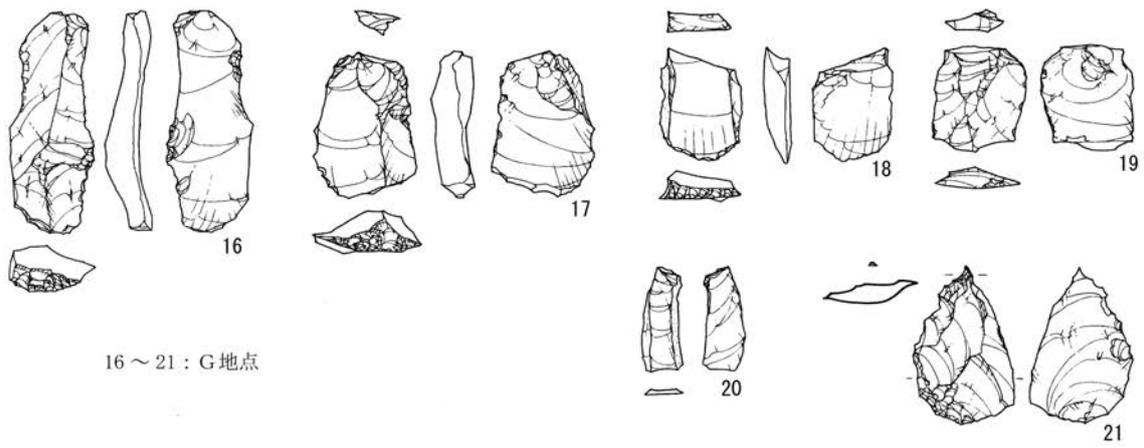
7はC4地点東端部（第8図のC4地点右上の印）で採取した安山岩製の部分加工ナイフ形石器で、最大長5.95cm, 最大幅3.00cm, 最大厚1.20cm, 重量14.38gである。打面際の一边を新欠するが先端部にかけて狭まる二等辺三角形を呈した縦長剥片を素材とする。主要剥離面は平坦で打点直下に平坦な打瘤裂痕が広がる。背面には主要剥離面と同一方向の剥離痕などをとどめている。摂理面様の面を打面とし、その一端に3打ほどの加工を施しているが、加工縁端部を新欠する。先端部とその両脇にも細かな調整が施されており、剥片の形状やその加工内容から縦長状剥片素材の基部を中心とした部分加工ナイフ形石器と考えられる。8はC1地点で採取された安山岩製の有茎尖頭器未製品で上半部を新欠しており、現状で最大長5.05cm, 最大幅2.90cm, 最大厚0.65cm, 重量13.47gである。打点部を基部側に設定し両側辺に粗い調整加工を施している。当資料にはK1と記されているが、C1の誤り⁽¹⁾である。9はC2地点で採取された安山岩製の平基の石鏃で、最大長1.80cm, 最大幅1.50cm, 最大厚0.25cm, 重量0.58gである。

C4地点（第2図22～30）のうち23・30が16追加報告資料で、それ以外が07追加報告資料である。全て安山岩製で、縦長状剥片を素材とした二側縁加工のナイフ形石器（23）、先端部を欠くが背面刃部縁の平坦な石核底面と打点が移動する複数の剥離痕を留めた規模の大きな横長剥片素材のナイフ形石器（24）、横長剥片石核（25）、横長状の剥片（26～30）、凹基の石鏃（22）などがある。石鏃を除けば二側縁加工のナイフ形石器（23）と横長状剥片（30）がやや粗目の安山岩である以外ほぼ同一系統の岩質の安山岩である。

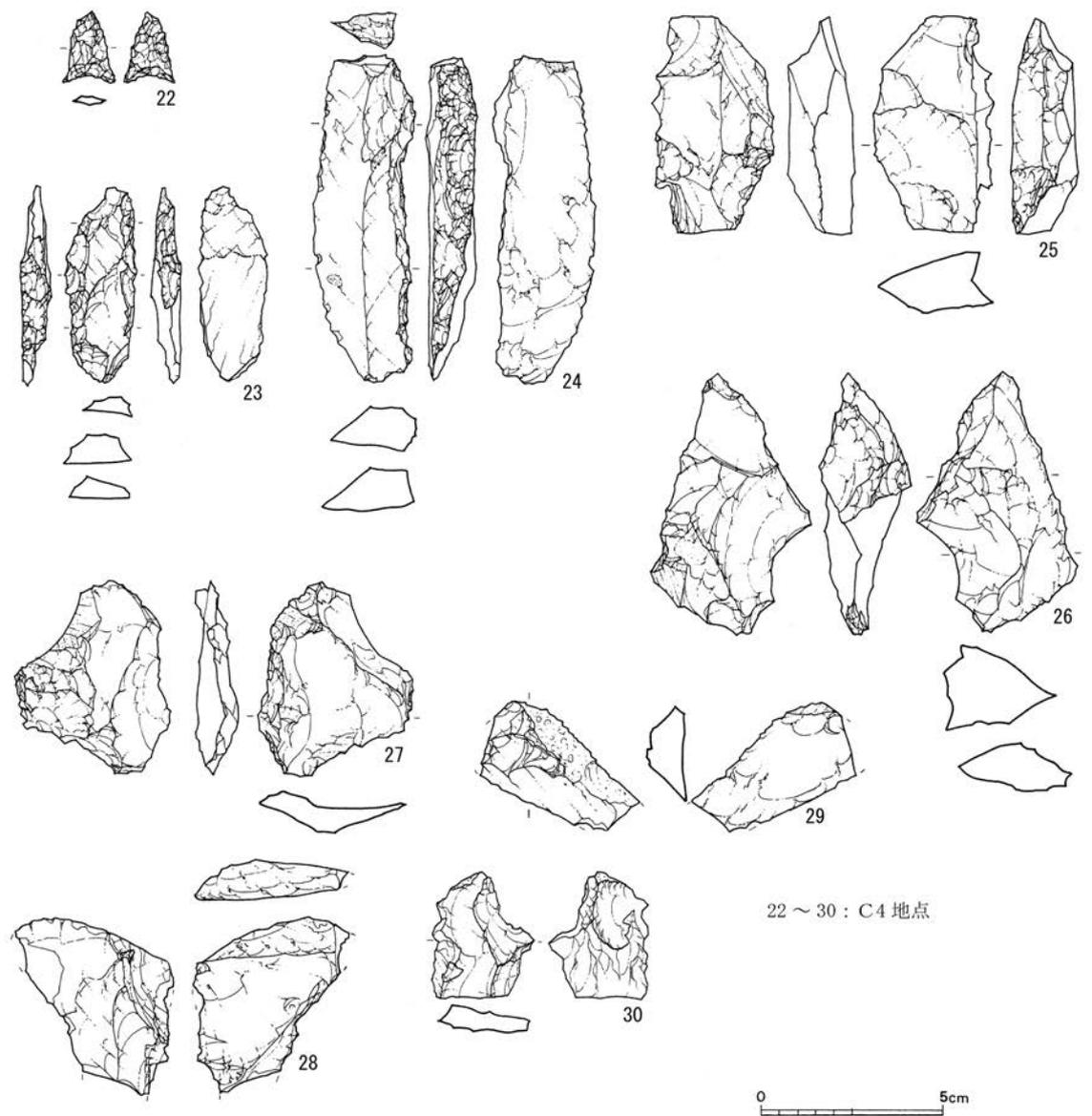
樽床遺跡群N地点の資料（第1図10～12）

N地点（標高740m前後）は、聖湖東岸の中央部付近に広く張出した台地状の平坦面にありN1・N2・N3の3地点に分かれている。86報告では石鏃・縄文土器など縄文時代資料を多く報告した。

10は黒曜石製の凹基の石鏃で、基部の一方を欠失するが現状で最大長2.70cm, 最大幅1.40cm, 最大厚0.35cm, 重量0.86gである。並行する押圧剥離で丁寧に仕上げられてい



16 ~ 21 : G地点



22 ~ 30 : C4地点

第2図 樽床遺跡群G・C4地点の追加報告資料 (1/2)
 (16 ~ 22, 24 ~ 29 : 三枝 2007b 掲載, 23・30 : 三枝 2016 掲載)



第3図 苜屋形遺跡B地点の報告資料 (1/2)
 (三枝 2007b 掲載)

る。11は安山岩製の凹基の石鏃で、最大長2.65cm、最大幅1.85cm、最大厚0.35cm、重量1.32gである。12はN2地点で採取された安山岩製の凹基の石鏃で、最大長1.55cm、最大幅1.40cm、最大厚0.20cm、重量0.45gである。素材剥片の主要剥離面打面側を上部に設定し、背面中央に平坦な剥離痕を留めている。丸味を帯びた基部両端が外反し粗目の加工で先端部を丸く収めている。所謂トトロ石器にあたる。10・11共にN地点と記載されている。

樽床遺跡群M地点の資料（第1図13）

M地点（標高749m前後）は、聖湖東岸の南半部で標高740m前後の緩やかな山麓斜面に位置している。86報告ではナイフ形石器や錐形石器、横長剥片と同石核などの他に石鏃・縄文土器など縄文時代の資料を多く報告した。

13は安山岩製の凹基の石鏃で上半部を欠き、現状で最大長1.50cm、最大幅2.45cm、最大厚0.20cm、重量0.84gである。

樽床遺跡群SN地点の資料（第1図14・15）

SN地点は、聖湖西岸北部で柴木川を挟んでC地点の対岸にあたる標高750m前後の広い台地状地形の南岸に位置しており、86報告では錐形石器や縦長・横長剥片の他に石鏃を報告した。

14は安山岩製の凹基の石鏃で、最大長2.25cm、最大幅1.80cm、最大厚0.30cm、重量0.96gである。15は安山岩製の削器で、最大長6.90cm、最大幅5.70cm、最大厚1.70cm、重量36.45gである。展開右側図中央の面は平坦な分割面様を呈しており、石核の素材剥片の主要剥離面である。左側図中央の面が当資料の素材剥片の主要剥離面で、剥片剥離後に下端の自然面から剥離した剥離痕との境付近を打点として両側面で横長状の剥片を剥離し、上辺に粗い加工を施している。石核を転用した可能性もある。

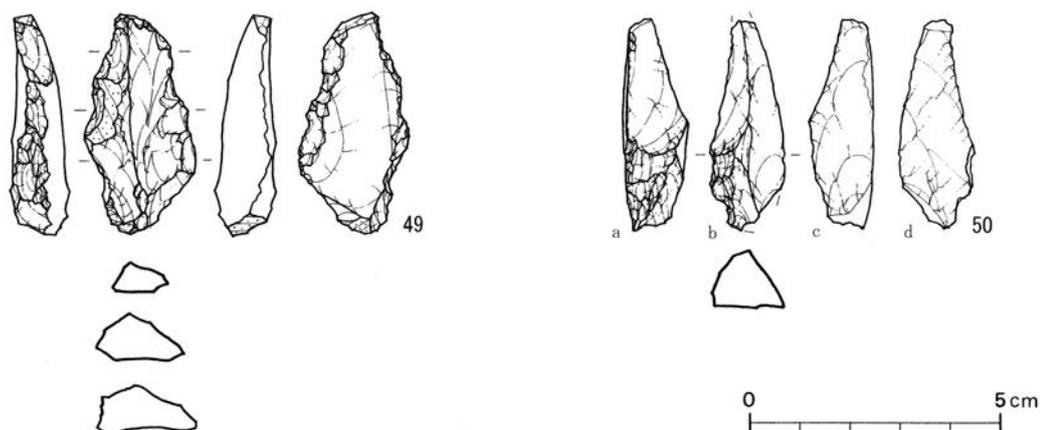
苜屋形遺跡B地点の資料（第3図31～48）

樽床遺跡群とは別に八幡高原の外に立地するものとして苜屋形遺跡B地点（三枝2007b）が挙げられる。この遺跡は同じ太田川水系上流部で柴木川とは別支流である滝山川（加計で太田川に合流）の上流部に所在するもので、樽床遺跡群のほぼ中央部にあたる虫送峠（第6図。以下、当遺跡群からの距離はここを起点とする）から直線距離で北東に約13kmの距離にある。A・B地点の小規模な独立丘陵のうちA地点では縄文土器碎片を確認したが工事により消滅、100m程隔てたB地点から安山岩製のナイフ形石器類（32～37）・削器（38）・削片（40）・剥片（41～45）・縦長剥片石核（48）・石匙（31）の他に黒曜石製の錐形石器（39）や流紋岩製の剥片（46・47）などを採集した。

86報告資料の訂正（第4図49・50）

86報告資料のうち加工痕のある剥片として報告した2点について、今回ナイフ形石器として再分類した。

49は、最大長4.40cm、最大幅2.20cm、最大厚1.25cm、重量10.35gである。僅かに黄色味を帯びた半透明のアメ色で一部に白濁部分があり瑪瑙製とみられる。横長剥片を素材としており、剥片の下辺縁側に刃潰加工を施しているが、基部側の加工については背面側からの剥離である。背面には素材剥片の主要剥離面と同一方向の2面の剥離痕と、中央部に石核底面と見られる平坦な節理面が残されている。また、主要剥離面の打面側縁辺の表裏にも剥離痕が密集しているが、削器の加工等とは異なり交互に残され剥離痕の打点部が鈍化を見せている事から使用痕とみられ



第4図 ナイフ形石器実測図 (2/3)
(49 : 1986年報告第13図45, 50 : 同13図43)

る。採集地点は不明で86報告では加工痕のある剥片として報告(86報告第13図45)したが、前述の要素から横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器として再分類した。

50は、安山岩製で最大長4.20cm, 最大幅1.00cm, 最大厚1.30cm, 重量6.20gで、展開図左側からa～d面と表記する。c面が素材剥片の主要剥離面で、打面部(基部)と先端部を欠損している。また、d面は1段階前の主要剥離面でa面上半の剥離痕はその背面にあたる。a面下半から基部にかけて刃潰加工を施しており、断面が三角形を呈する部分加工のナイフ形石器として再分類した。加工部以外の縁辺部に使用痕と思われる微細な剥離痕が観察される。86報告では地点不明として報告(同第13図43)したが、正しくはG地点の採集資料である。

3 横長剥片剥離関係資料について

今回再掲載したC4地点と苧屋形遺跡B地点は安山岩製の横長剥片素材のナイフ形石器を特徴としている。そのため86報告のうちの横長剥片剥離に関連する特徴的な資料を抽出(第5・6図)し若干の整理を行う。

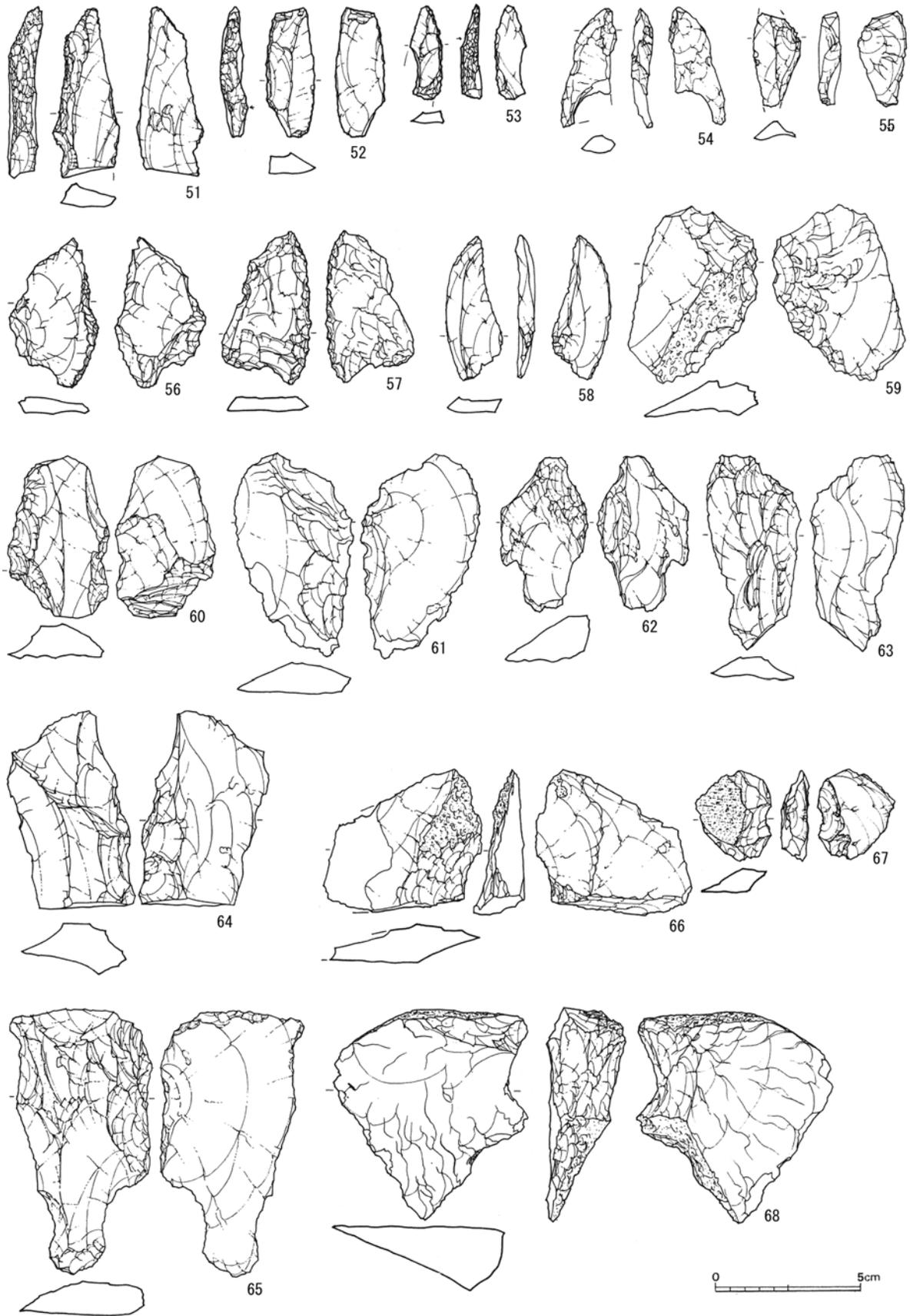
石器では、横長剥片を素材としたナイフ形石器3点(51～53)はいずれも背面に打点が移動する複数の剥離痕を有すもので、先述の49もこれにあたる。52・53は背面に平坦な石核底面を、51については広い剥離痕を残している。削器(56・57)は、素材剥片背面に同一方向～横方向などの剥離痕を持つ。

剥片では、背面の剥離縁に石核素材剥片の主要剥離面を有し単一の剥離面を持つもの(54・58)、同じく背面に複数の剥離痕を持つもの(55・59～61)がある。前者の54は所謂ファーストフレイクに相当するもので、58は翼状剥片である。後者の59・61については背面に打点が左右に移動する複数の剥離痕を有し、60では対向する辺でも打点が移動する剥離作業を行っている。

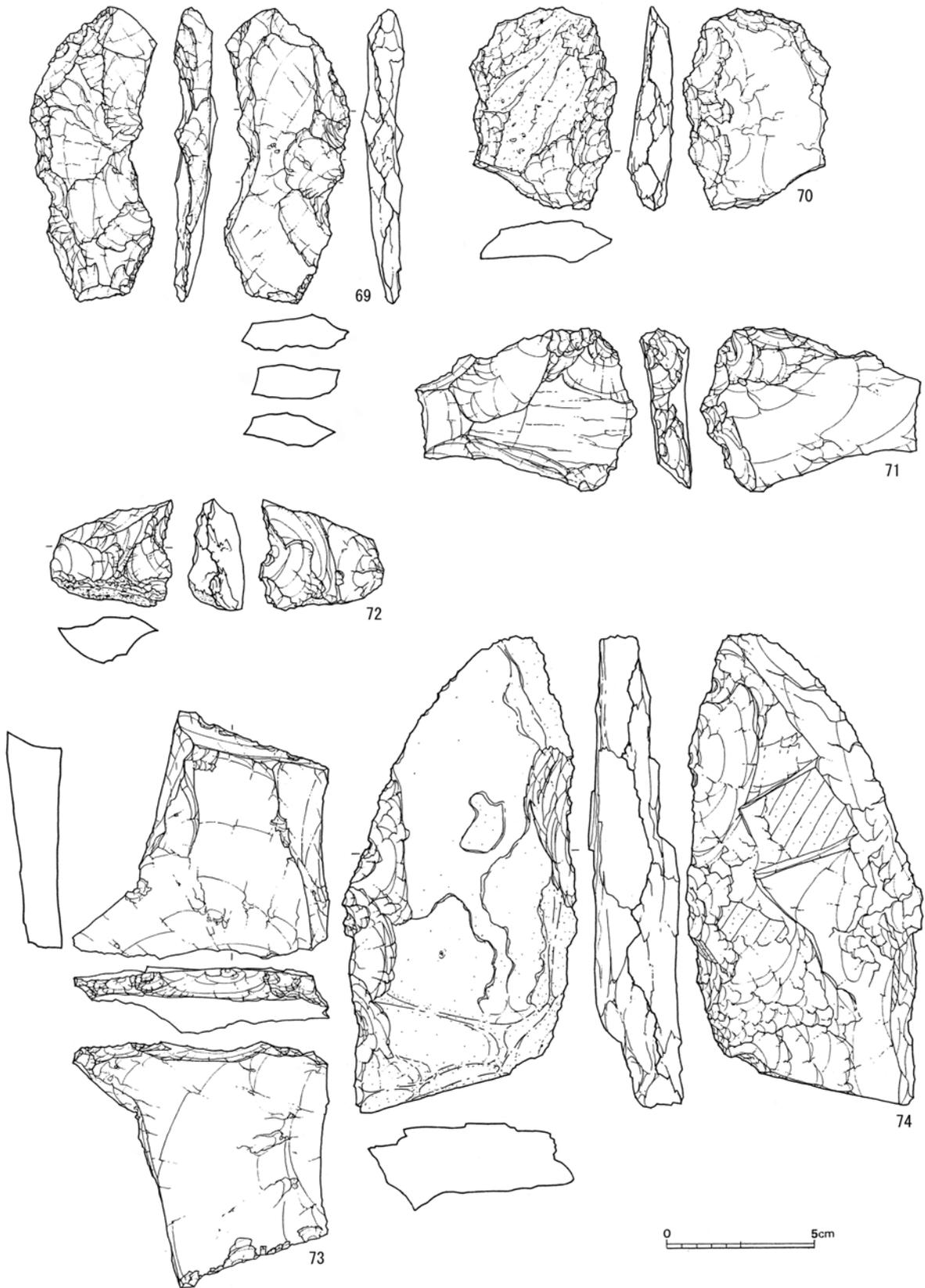
次いで62～65は背面が同一・横・反対方向などの複数の剥離痕から成るもので、62・63は背面に打点が移動する複数の剥離痕を有し、64・65では加えて反対方向の剥離痕を留めている。

石核では素材剥片の主要剥離面に作業面のある横長剥片石核を抽出した。

素材剥片の打面側に作業面を設定するもの(66～70)のうち、66・67は作業面に単一の剥離痕をとどめ山形に打面調整を施す。68は平坦打面、70は打点が打面縁を移動し交互剥離を施し、69



第5図 樽床遺跡群（1986年報告資料）の横長剥片剥離関係資料1（1/2）



第6図 樽床遺跡群（1986年報告資料）の横長剥片剥離関係資料2（1/2）

では素材剥片の打面側での交互剥離に加えて対向する辺でも剥片剥離を行っており、74も同じく対向する二辺で剥離を行っている。その他に、背面の平坦な剥離痕を打面として素材剥片の剥離方向と直交する辺に作業面を設け打点が横に移動する複数の剥離痕を残すもの(71・73)や、黒曜石製で主要剥離面下辺に作業面を設けるもの(72)などがある。

66・67は所謂翼状剥片石核である。66については、打面調製などの剥離がある程度進行した後半に半切し翼状剥片の剥離を行ったものと見られる。67については黒曜石製で最大幅が3.20cmと極めて小型ではあるが、打面調製や作業面の状況と素材剥片の主要剥離面との関係など、翼状剥片石核の要素を満たしている。同じく黒曜石製の同規模で主要剥離面側に剥離痕を持つ資料(86報告第29図219・220)があるが、それらについては主要剥離面の加撃痕跡や背面周辺部に小規模な剥離が加えられていることから、石核を転用した削器などの可能性もある。

また、素材剥片の主要剥離面側で打点が移動するなどの剥離を行うもの(86報告第32図230)もあるが、幅広～不定形な剥片や求心的剥離に近い剥離を行う石核類との区分が不明確なためここでは対象外とした。

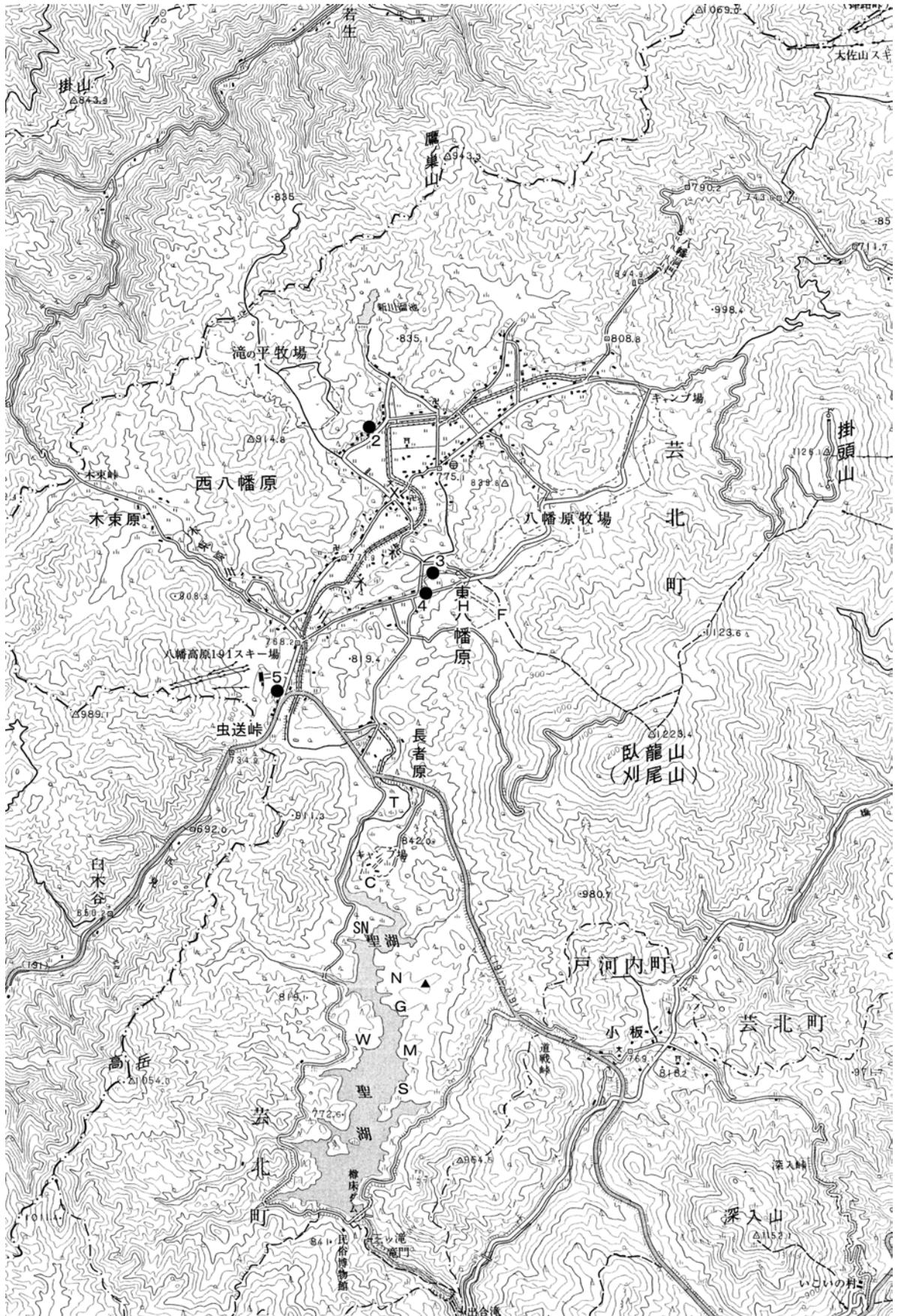
ナイフ形石器を含む横長剥片剥離関連資料は駄原地点、C・C2・C4地点、N・N2地点、G地点、M1地点、SN地点、W地点などや苜屋形遺跡B地点で確認されている。特徴として、翼状剥片や同石核なども存在するが典型的な国府型ナイフ形石器は無く、ナイフ形石器は背面刃部縁の平坦な石核底面と複数の剥離痕を留める剥片を素材としている。剥片・石核類には求心的剥離に近いものなども見られるが、平坦面打面や稜部加撃で打面縁を打点が移動する剥離を行うものが中心となっており、ナイフ形石器素材剥片の背面構成傾向とも符合している。

採集資料のため、時期の異なる資料の存在も考慮する必要はあるが、安山岩製の横長剥片素材ナイフ形石器が剥片剥離技術関連資料と共に確認されており、単独の搬入事例などとは異なる瀬戸内系石器群との関わりが窺われる。

4 樽床遺跡群の立地について

樽床遺跡群は、広島県北西部で島根県益田市・那賀郡金城町と境を接する標高1,000m台の西中国脊梁山地に囲まれた八幡高原⁽²⁾に所在し(第7図)、周辺には山陰側・山陽側とも主にNE-SW方向とそれに直交する急峻な線状の断層谷が延びる地形が広がっている。太田川上流部の一支流である柴木川の最上流領域にあり、北半部の八幡盆地(標高約800～760m)と南半部の聖湖周辺(標高約760～710m)の地区に二分される。このうち北半部の八幡盆地側では、北西側の滝の平牧場から木東原に沿って浜田方面に流れる周布川との分水嶺を有し、遺跡群のほぼ中央部にあたり柴木川が東に流れを変える虫送峠で益田に流れる高津川の支流(匹見川)最上流との分水嶺を有している。本稿では南半部の聖湖周辺地区(第8図)の遺跡立地を述べ、当遺跡群の立地環境なども整理する。

長者原地区から聖湖ダム附近にかけて南流する旧柴木川沿いには、東西に延びる狭長な樽床盆地が形成されていた。この地区の北端に位置するT地点は西長者原の山麓を流れる柴木川の蛇行によって形成された河岸段丘に位置し、河床面からの比高差は10m程度である。その南側に広がる城代地区の段丘上には南側に偏じて数箇所の散布地が確認されているC地点がある。柴木川を



第7図 樽床遺跡群位置図 (1/50,000) (国土地理院発行 平成11年『木都賀』・同13年『三段峡』使用)
 (1: 滝の平牧場, 2: 三島, 3: 駒原, 4: 大橋, 5: 押ヶ峠, ▲は1986年報告の第27図204採集地点)

望むC 1～C 3地点は旧河床面から10数m程度の比高差（C地点以南の比高差は旧地形図による）であるが、河岸段丘内に所在するC 0・C 4地点では20～30m前後の比高差を示している。

柴木川を挟みC地点の南に位置する長谷地区には、段丘の南側に沿いS N 1～S N 3の3地点が確認されており、旧河床面からの比高差は10数～20m程度である。更に蛇行する柴木川を挟んだ東側の芋ガ原地区から吉ガ瀬地区の間にはN 1～N 3地点が所在する。現地は長者原や長谷地区と同様に平坦な河岸段丘となっており、旧河床面からの比高差は10数～20m程度である。

N 3地点の南側の吉ガ瀬地区には東西に細長い尾根が延び、その付根附近にG地点が所在する。旧河床面からの比高差は10数m程度で、地点内の小規模な土層断面からATが確認されている。尚、N 3地点とG地点の間の谷奥付近で縦長剥片石核（86報告第27図204）を確認している。

G地点の南側には東樽床地区のM 3・M 2地点と秋野地区のM 1地点が連なり、M 1地点附近から西南に延びる丘陵最高所付近にS地点が所在する。いずれも旧河床面からの比高差は10数m程度である。

M 3地点と柴木川を挟んだ上樽床地区には、旧河床面からの比高差が20m程度の丘陵上にW地点が所在する。柴木川西岸でこのW地点以南の中・下樽床及び隠居原にかけての地区と東岸の東下樽床地区では遺跡は確認されていない。

これら聖湖周辺で確認された遺跡が人造湖波打ち際での発見という前提は無視できないが、旧地形面の柴木川を望む河床面からの比高差が10～20m程度の低位丘陵（河岸段丘）際部分への選択的な立地は窺える。ただC 0・C 4地点やN 1～N 3地点などの立地から、丘陵縁部に限らず段丘内側部分にもより多くの遺跡が展開している可能性が高い。北半部の八幡盆地地区においてもより多くの遺跡が存在する可能性⁽³⁾が、また同一水系別支流上流の苜屋形遺跡B地点周辺にも河川沿いに低位段丘が形成されており、同地区周辺でも潜在的な遺跡の広がりが見込まれる。

中国脊梁山地の遺跡と樽床遺跡群

次いで、第9図で示す山陽西部の中国山地南斜面における後期旧石器時代遺跡について述べる。脊梁部では、ここを境に山陽側・山陰側に流れる河川最上流部で分水嶺が形成されている。県北中央部の山陽側斜面に最上流部を持つ江の川水系は、三次盆地で流れを変え脊梁部が途切れる江の川関門を経て山陰側山地を流下し日本海に至っている。

この江の川関門以東あたる県北東部での旧石器時代遺跡は、庄原市高野町の只野原3号遺跡（辻・山田2013、三枝2017）と道後山の中組遺跡（三枝1992）の2遺跡と少ない。このうち只野原3号遺跡は、江の川水系支流の最上流部（神戸川）で脊梁山地沿いに広がる備北山地に所在する高原内にあり、斐伊川水系最上流部との分水嶺を有している。また中組遺跡は、周囲を脊梁面に囲まれた小規模な盆地状地形の一角で高梁川水系の支流（道後川）最上流部を望む段丘上に位置し、米子方面に流れる日野川最上流部との分水嶺を有している。

江の川関門以西で、江の川水系の山陽側斜面最上流部近くに位置する地宗寺遺跡は、同一水系の山陰側上流部に位置する島根県荒槇遺跡（吉川1983）と分水嶺を挟み直線で約8km弱の距離に位置している。

江の川水系域以西の県北西部のうち、太田川水系支流の最上流部に位置する樽床遺跡群では北半部で周布川水系と、同じく中央部で高津川（匹見川）水系とそれぞれ分水嶺を有している。また、苜屋形遺跡B地点の上流部では江の川水系の山陰側上流部と分水嶺を有してお



第8図 樽床盆地内遺跡分布図

(広島県発行 昭和28年1/1万「八幡村其一」をもとに作図・トレース)

り、西端部の太田川水系最上流部に位置する冠遺跡群周辺には、瀬戸内方面に流れる小瀬川・錦川などの最上流部を有している。

因みにこれら脊梁山地部に分布する遺跡のうち、瀬戸内系の横長剥片剥離関係資料などAT降下後段階を中心とした資料は、冠高原遺跡群（梅本・三枝ほか1983）や樽床遺跡群など西端～北西部の報告事例が顕著である。これに対して北東部では、AT上位層から横長剥片素材のナイフ形石器などが出土した只野原3号遺跡と、浮布降下軽石層直上から黒曜石製剥片が出土した中組遺跡のみと少ない。県北部の脊梁山地南斜面には未踏査の地域も多いため、実態の判明は今後に期したい。

ここで当遺跡群の位置関係を概観すると、中国地方沿岸部までの距離は前述の虫送峠を基点（以下同じ）として太田川河口（広島市）には南東に直線距離で約44km、周布川河口（浜田市）には北西に直線距離で約23km、高津川河口（益田市）には西に直線距離で約33kmである。更に周辺に所在する主な遺跡までの距離は、安山岩原産地遺跡である冠遺跡群は西南に直線距離で約28kmに、島根県新槇原遺跡（中村1987）は虫送峠から直線的な断層谷（匹見川）を約8km程下った場所に位置している。また先述のように苜屋形遺跡B地点は北東に直線距離で約13kmに位置するが、そこから東に直線距離で約20km程で地宗寺遺跡（三枝・鍛冶1982）、同じく北東に直線距離で約13km程で島根県堀田上遺跡（竹広1991）に至る。

中でも冠遺跡群は太田川沿いの線状断層谷を遡上すれば直線距離の1.5倍程度で到達出来る位置にあり、地宗寺遺跡や樽床遺跡群G・N地点などで冠山遺跡群周辺産出の安山岩類が確認（藁科2001a）され、ATの降灰前後を通した安山岩類の供給が示されている。尚、黒曜石類の原産地分析（藁科2001b）では、樽床遺跡群G地点の基部加工ナイフ形石器・搔器や縦長剥片剥離関係資料などは隠岐産、G・C0地点の細石刃関連資料は北部九州産である事が示されている。

このように脊梁山地南斜面の遺跡は、各水系最上流部に形成された中～小規模の盆状地形内の河川流域を望む低位段丘上に立地しており、盆地内に分水嶺などを経た山陰側への移動経路が存在する点で共通する。ただ、太田川水系域にある県西部～北西部と、西条盆地周辺まで中位準平原面（以下「中位面」と略。大局的には吉備高原面の延長にあたる）が広がる県中部～東部とでは地理的な環境が大きく異なる。

太田川水系域ではNE-SW方向を中心とした急峻な線状断層谷が続き瀬戸内地域との距離は比較的近く中間部での遺跡分布は希薄である。これに対して後者では、中位面北辺にあたる三次一庄原盆地と南端にあたる西条盆地に遺跡が集まり双方ともその中間部にあたる世羅盆地周辺に緩やかな分水嶺を持つ河川で繋がるため、盆地間の移動が容易である。

これら中位面の遺跡の特徴として、三次盆地では下本谷遺跡配水池地点など中期旧石器時代と考えられる遺跡や、それに後続する後期旧石器時代初頭～前半の遺跡が多く分布（三枝2007a, 戸田・三枝2009, 三枝2015・2017）。AT降下後段階では、酒屋高塚古墳墳丘下（青山編1983）の国府型ナイフ形石器と塩町遺跡（三枝・鍛冶1982）の角錐状石器が挙げられる。

西条盆地では後期旧石器時代初頭～前半のものに五楽遺跡（三枝1988）や鴻巣遺跡（藤野編2007）、西ガガラ遺跡（藤野編2004）などがあり、西ガガラ遺跡からは横長剥片素材のナイフ形石器類が出土している。芦田川最上流部にあたる世羅盆地内では後期旧石器時代前半段階の筋原垣内遺跡（内藤1995）が、また中～下流域では亀山遺跡（新谷ほか1982, 三枝1985）からAT降下

梁山に沿いに最寒冷帯が分布（吉田 1977）している。あくまで現在の気温分布を参考としているが、県中～東部などに広がる中位面地帯には総じて脊梁山地部と瀬戸内地域との中間的な環境が広がっていたものと想定される。これに対して、県西～北西部の脊梁山地域に位置する当遺跡群や冠遺跡群などは、中間地帯としての広い高原面に乏しく広島湾岸（三枝 2019）などの瀬戸内地域へ至る環境にあるといえる。

5 おわりに

当樽床遺跡群は、安山岩製の瀬戸内系石器群に加えて黒曜石を多用した搔器や縦長剥片素材の基部加工ナイフ形石器類などの存在を特徴としている。ここではナイフ形石器を中心とした安山岩製資料と遺跡の立地を通じた若干の整理を行いたい。

安山岩製の縦長剥片を素材としたナイフ形石器は、今回再分類したG地点の50と同地点の86報告第10図5、N地点の86報告第10図4、C4地点(23)と苧屋形遺跡B地点(33, 37)があり、C4地点(23)と苧屋形遺跡B地点(33)はやや粗目の安山岩を素材としている。このうちC4地点のナイフ形石器(23)は二側縁加工で岡山県恩原1遺跡R文化層（稲田編 2009）、兵庫県板井寺ヶ谷遺跡下層文化層（山口 1991）などに、またN地点86報告第10図4と苧屋形遺跡B地点(33)はやや小型で地宗寺遺跡、段遺跡（辻 2012）、和知白鳥遺跡（沖・山田 2011）、西ガガラ遺跡第2地点第6ブロック、兵庫県七日市遺跡第II文化層（久保・藤田 1990）などに類例がある。C4地点(23)、N地点86報告第10図4、苧屋形遺跡B地点(33)については、樽床遺跡群の採集資料の中では形態的に見てAT降下前段階に遡り得る可能性のある資料といえる。G地点(50)と苧屋形遺跡B地点(37)については、基部の加工に差があるものの肉厚で断面形態が三角形の尖頭状を呈する点で共通する形態の基部加工ナイフ形石器の一種である。

また、C4地点の基部加工ナイフ形石器（第1図7）の類例としては当遺跡群（86報告第10図5～8）のほか冠遺跡群A・C地点、西ガガラ遺跡第2地点第1ブロック、広島市下沖5号遺跡（岡野ほか 1988, 三枝 2019）、島根県原田遺跡第I文化層（伊藤・石橋 2008）、恩原遺跡S文化層（稲田編 1996）などで報告されている。基部両端に加工を施す形態のものが多く、当遺跡群の上記既報資料も含めて主に後期旧石器時代後半期に属するものと考えられる。これに対して、本例は素材剥片の打面端付近に限られた範囲に加工を施し先端部に微細な調整を加えており、形態的には東京都多摩蘭坂遺跡（上村・中村 2003）、高井戸東遺跡（小田ほか 1977）や西ガガラ遺跡第2地点第1ブロック例などに近い。県内では下本谷II期（戸田・三枝 2009, 三枝 2015・2017）の基部加工ナイフ形石器（II B類）が横長剥片素材で占められ縦長剥片素材の資料は少ない。当資料の所属時期については不明であるが、下本谷I期の基部加工ナイフ形石器（I B類）の存在を考えると今後留意すべき形態である。

安山岩製の横長剥片剥離技術関係資料についてみると、剥片剥離は打面縁を打点が移動し作業面で複数の剥離を行うものが主体となっており、ナイフ形石器素材剥片の背面構成とも矛盾しない。それらの要素は冠遺跡群A・B地点や恩原S文化層にも見受けられ、角錘状石器が確認されていないことから冠遺跡群第2期（沖・妹尾ほか 2001）でも後半にあたる可能性がある。藤野氏編年（藤野・多田 2010）第III期に対比される。

また、黒曜石製で小型の翼状剥片石核については類例に乏しく判断材料に欠ける。ただ、兵庫県七日市遺跡第Ⅱ・Ⅳ文化層に同じく小規模で素材剥片の主要剥離面側に作業面を設ける石核類(久保・藤田1990, 山本編2004)があり、素材剥片打面側への作業面設定や山形の打面調整なども見られるなど留意しておきたい。

次いで、遺跡の立地に関しては中国脊梁山地の遺跡と瀬戸内地域を含めた中位面に展開する遺跡との関係について触れる。

稲田氏は中国山地脊梁面に展開する遺跡を、常時的集中や定期的回帰を行う各種動物群を対象とした狩猟・採集や居住に適した場所として選択されたと考えた。その上で調査事例を基にそれらの遺跡を時期別に捉え、AT降下前段階での中国山地尾根筋の縦断ルートの可能性を指摘し、AT降下後では瀬戸内地域との文化的な交流や直接的な人の移動を想定(稲田1990など)した。更に恩原2遺跡S文化層の出土資料などをもとに瀬戸内地域を含めた周辺遺跡との石器の系統や石材の選択状況などから、中国山地東部におけるナイフ形石器文化の石材文化伝統と旧石器集団の回帰遊動領域を想定(稲田1996など)した。また大秦司氏は、哺乳動物研究の視点から脊梁山地におけるそれらの遺跡群について、分水嶺を越えて季節移動を行う大・中型草食動物群を対象とした狩猟キャンプと想定(大秦司1990)した。

岡山県内の脊梁山地域には野原や蒜山高原などの遺跡群が点在し、北辺にあたる津山盆地に遺跡の分布域があるものの吉備高原面での遺跡分布は希薄で、瀬戸内沿岸部に多数の遺跡が分布している。この中位面と遺跡の関係について、稲田氏は中国山地東部石材文化伝統における集団の石材獲得を伴う長距離移動の中で、津山盆地を含めた旭川・吉井川・高梁川の中流域を、現状では石材採取の交通の通過点(稲田1996)と捉えた。安山岩(サヌカイト)原産地である香川県国分台周辺(竹岡1988など)との関係を前提としている。

山陽西部の中国山地南斜面においても、同様に脊梁山地部に冠遺跡群や樽床遺跡群などの遺跡が確認されているが、瀬戸内沿岸部の遺跡は少なく中位面周辺の盆地に遺跡の集中する領域が形成されている。これら中位面北辺の三次一庄原盆地や南端に位置する西条盆地などの遺跡集中域は、瀬戸内地域と脊梁山地域との中間的な環境と推測され、各遺跡の時期や内容に偏りはあるものの、AT降下後段階を中心とした瀬戸内地域との交流は断片的ではあるが読取れる。冠遺跡群における安山岩原石の採取は、上記の各遺跡集中域などから主要河川を経由して行われたと考えられ、冠遺跡群での分析はその一端を示している。

上記の中位面への遺跡の展開は中国山地東部の吉備高原面での様相とは異なり、通過点としての位置付けとは別の活動領域が想定される。その場合、脊梁部に形成された遺跡もそれらの領域の一端を担っていた可能性が高いものと考えられる。ただ、樽床遺跡群ではナイフ形石器を含む横長剥片剥離関係資料類の存在などから、地理的な環境も含めて瀬戸内方面との関係を考慮する必要がある。

謝辞

本文の作成にあたり、北広島町教育委員会原田靖久氏には資料の熟覧や再報告などについて、特定非営利活動法人 西中国山地自然史研究会の上野吉雄・河野弥生氏には再検討などについての便宜を図っていただきました。また特定非営利活動法人 広島文化財センター重森正樹氏、公益財

団法人広島県教育事業団埋蔵文化財調査室岩本芳幸氏には関係する書籍等の提供を受けました。文末ですが記して謝意を表します。

注

- (1) 当樽床遺跡群は在野の植物学者である児玉集氏により発見され、八幡盆地側から聖湖畔域に至る広範囲にわたり地点別の資料採集が行われた。ただ、採集過程で一部の表記に混乱も見られた。八幡盆地側の滝の平牧場地点近くに設定されたK地点では、現地踏査で対象地点を再確認できず同氏からキャンプ場地点のC地点と混同した可能性を伝えられた。そのためK・K1・K2と記入された資料についてはそれぞれC・C1・C2として把握する事とした。
- (2) 今村外治氏（今村 1969）は、北半部の八幡盆地と南半部の樽床貯水池（聖湖）周辺に分けその総称として八幡高原と呼称しており、当文でもこの表現に沿った。
- (3) 今村外治氏（今村 1969）は、八幡盆地南端の虫送峠に近接する池ヶ原の新期八幡湖成層中から石鏃を、またその上流で柴木川に木東原川が合流する地点近くでも石器の採集を報告している。八幡盆地地域では、周辺の低位丘陵上により多くの遺跡が想定されているが、加えて盆地内に広がる新期八幡湖成層下面にも後期旧石器時代から縄文時代にかけての生活面が残されている可能性が高い。

挿図出典

第1図：三枝が実測・作図・トレース。第2・3図：23・30は三枝 2016 から転載。16～22・24～29・31～48は三枝 2007b の第2・3・5・6図から転載。第4図：49は梅本・児玉・三枝・柴田・辻 1986 の第13図45を北広島町教育委員会の承諾を得て三枝が再実測・トレース、50も同じく第13図43を加筆・修正・再トレースし掲載。第5・6図：梅本・児玉・三枝・柴田・辻 1986 の第10～30図から抽出し転載。第7図：国土地理院発行 平成11年1/5万「木都賀」・同13年1/5万「三段峡」を使用。第8図：広島県発行 昭和28年1/1万「八幡村其一」をもとに三枝が作図・トレース。第9図：三枝が作図・トレース。

引用・参考文献

- 青山 透編 1983 『酒屋高塚古墳』広島県教育委員会
- 伊藤徳広・石橋裕子 2008 『原田遺跡（4）第1分冊－旧石器時代の調査－』尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会
- 稲田孝司 1990 「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究』第29巻第3号 第四紀研究会
- 稲田孝司 1996 「恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と殖民集団」『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 稲田孝司 2010 『旧石器人の遊動と殖民 恩原遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」065 新泉社
- 稲田孝司編 1996 『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 稲田孝司編 2009 『恩原1遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 今村外治 1969 「八幡高原の地質 特に八幡盆地の湖成層について」『三段峡の陸水と生物 総合学術調査研究報告』広島県教育委員会
- 上村昌男・中村真里 2003 『多摩蘭坂遺跡IV－東京建物株式会社共同住宅建設に伴う事前調査－』国分寺市遺跡調査会
- 梅本健治・児玉 集・三枝健二・柴田喜太郎・辻 満久 1986 『樽床遺跡群の研究』樽床遺跡群研究会編 芸北

町教育委員会

- 梅本健治・三枝健二 1983 「冠遺跡」『中国縦貫自動車道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（4）』広島県教育委員会
- 大泰司紀之 1990 「旧石器遺跡の位置と狩猟獣の季節移動ルートに関する考察」『第四紀研究』第29巻第3号
第四紀研究会
- 岡野孝子・岡野幸夫・高田正剛・若島一則 1988 『広島市佐伯区五日市町所在 一般県道原田五日市線（石内バイパス）道路改良工事事業地内遺跡群発掘調査報告』広島市の文化財第41集 広島市教育委員会
- 沖 憲明 2012 「広島県山県郡北広島町壬生西谷遺跡の旧石器時代資料について」『芸備』第41集 芸備友の会
- 沖 憲明・妹尾周三ほか 2001 『冠遺跡群Ⅷ－冠遺跡群発掘事業最終報告書－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター
- 沖 憲明・山田繁樹編 2011 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（15）和知白鳥遺跡1（旧石器時代の調査）』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第38集 広島県教育事業団
- 小田静夫・伊藤富治夫・C. T. Keally・重住 豊編 1977 『高井戸東遺跡』高井戸東遺跡調査会
- 加藤 謙・三枝健二 1992 『冠遺跡群Ⅰ－1991年度の調査－』広島県教育委員会
- 吉川 正 1983 「遺跡の立地・環境」『横道遺跡－詳細分布調査報告－』瑞穂町教育委員会
- 久保弘幸・藤田 淳編 1990 『七日市遺跡（Ⅰ）（旧石器時代遺跡の調査）』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XⅡ－1） 兵庫県教育委員会
- 三枝健二 1985 「亀山遺跡採集のナイフ形石器」『旧石器考古学』30 旧石器文化談話会
- 三枝健二 1988 「東広島市西条町採集の石器」『芸備』第19集 芸備友の会
- 三枝健二 1992 「道後山採集の旧石器資料について」『芸備』第21集 芸備友の会
- 三枝健二 2002 「旧石器時代」『新市町史 通史編』広島県芦品郡新市町
- 三枝健二 2007a 『下本谷遺跡の基礎的研究』三次旧石器文化研究会
- 三枝健二 2007b 「平成18年度テーマ研究に伴う県内旧石器関係資料報告」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第6集 広島県立歴史民俗資料館
- 三枝健二 2015 「下本谷Ⅰ・Ⅱ期の再検討」『三旧研アーカイブス』三次旧石器文化研究会
- 三枝健二 2016 「広島県内旧石器資料報告（2）」『三旧研アーカイブス』三次旧石器文化研究会
- 三枝健二 2017 「下本谷Ⅰ・Ⅱ期の再検討（2）」『広島文化財研究』第2集 広島文化財センター
- 三枝健二 2019 「広島湾岸の後期旧石器時代遺跡について」『広島文化財研究』第3集 広島文化財センター
- 三枝健二・鍛冶益夫 1982 『地宗寺遺跡発掘調査報告－国道261号線道路改良工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター
- 佐々木直彦編 1986 『歳ノ神遺跡群 中出勝負峠墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第49集 広島県埋蔵文化財調査センター
- 新川 隆・重森正樹・沖田健太郎 2003 『郡山大通院谷遺跡』吉田町地域振興事業団調査報告書第8集 吉田町地域振興事業団
- 新谷武夫・樫井 勝・伊藤 実 1982 『亀山遺跡－第1次発掘調査概報－』広島県教育委員会
- 妹尾周三 1989 『冠遺跡群 D地点の調査』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第80集 広島県埋蔵文化財調査センター
- 竹岡俊樹 1988 「旧石器時代について」『香川県史1 原始・古代』香川県

- 竹広文明 1991 「堀田上遺跡，旧石器時代」『主要地方道浜田八重可部線特殊改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会
- 辻 満久編 2012 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（20）段遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第43集 広島県教育事業団
- 辻 満久・山田繁樹編 2013 『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（23）只野原1号遺跡・只野原2号遺跡・只野原3号遺跡』財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第47集 広島県教育事業団
- 戸田正勝・三枝健二 2009 「広島県北東部における後期旧石器時代初頭の石器文化について－下本谷遺跡範囲確認調査資料の再検討から－」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第7集 広島県立歴史民俗資料館
- 内藤久雄 1995 『久井町文化財調査報告 羽倉城跡 筋原垣内遺跡』久井町教育委員会
- 中村友博 1987 「石器遺物」『新榎原遺跡発掘調査報告書』匹見町教育委員会
- 成瀬敏郎 1977 「地形地域区分」『広島県史 地誌編』広島県
- 平井 勝 1979 『野原遺跡群 早風A地点』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（32）岡山県文化財保護協会
- 藤野次史 2001 『石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究－中国地方西部の石器石材に関する基礎調査－』
- 藤野次史 2006 「中・四国地方，近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』安齋正人・佐藤宏之編 同成社
- 藤野次史編 2004 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－ががら地区の調査－』広島大学環境保全委員会埋蔵文化財調査室
- 藤野次史編 2007 『広島大学東広島キャンパス埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－アカデミック西部地区の調査－』広島大学埋蔵文化財調査室
- 藤野次史・多田 仁 2010 「中国・四国地方」『講座 日本の考古学1 旧石器時代 上』青木書店
- 山口卓也 1991 『多紀郡西紀町 板井寺ヶ谷遺跡－旧石器時代の調査－』近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書（XⅣ－1）考古学編 兵庫県教育委員会
- 山本 誠編 2004 『兵庫県氷上郡春日町 七日市遺跡（Ⅲ）旧石器時代の調査』兵庫県文化財調査報告第272冊 兵庫県教育委員会
- 吉田栄夫 1977 「気候環境」『広島県史 地誌編』広島県
- 藁科哲男 2001a 「冠遺跡群出土遺物の原材産地分析」『冠遺跡群Ⅷ－冠遺跡群発掘事業最終報告書－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター
- 藁科哲男 2001b 「中国地方西部遺跡出土の黒曜石製旧石器の原材産地分析」『石器石材からみた西日本における旧石器時代集団関係の研究－中国地方西部の石器石材に関する基礎調査－』

（さえぐさ けんじ 元当館主任学芸員）